（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　吉澤　保

フランス１８世紀の哲学者コンディヤックは感覚主義の典型を構築したことで知られるが、彼の処女作『人間知識起源論』(1746)－以下、『起源論』と略記－と主書『感覚論』(1754)の間には、主題と論点にとどまらない哲学的立場の相違がある。本論文は、両著作の主張と構成をつぶさに比較することを通じて、前者から後者への哲学上の変化がいかなるものであり、その変化がいかなる論理に導かれていたかを究明することを課題とする。その際、『起源論』が抱えていた理論的困難がいかなるものであり、それを著者自身がどのように自覚して『感覚論』を書き上げたかに注意を払い、そのことを通じて、彼の「感覚主義」が近世経験論の中でいかなる位置を占め、それが認識論と存在論にいかなる解答と困難を提起したかについて、見通しを提示している。

全体は三部からなり、最初の二部では、『起源論』と『感覚論』の論理構造を取り出すべく、入念なテクストの読解が行われている。この部分は、論者自身が認めているように、作品のパラフレーズと注釈に重点が置かれ、論文の積極的立論が見えにくいという難点があるが、これまで日本では詳細な読解の対象としては取り上げられなかったテクストを、コンディヤックの他の作品も参照し、さらに近世の哲学的伝統と関連させながら、その主張の意味と問題点を的確に指摘したことは功績である。第三部は論文の中心であり、三つのテーマを立てて、コンディヤック哲学の変化が論じられる。第一は、生得観念の排除、及びそれと連動する無意識の排除の徹底、第二は、決定論的風土における自由の可能性、第三は、モリヌークス問題 - 視覚は奥行き（空間三次元）の観念を触覚の助けなしに得ることができるか否か - に対する応答の変化である。論者はそのいずれのテーマについても、テクストの緻密な読みを踏まえて、感覚、記号、精神作用のそれぞれの局面で、コンディヤックが『起源論』の理論的困難を、記憶や欲望に精神の能動性を認める方向で解決を目指したことが示される。そして、「結論」の最終章では、これらの変化の根底にある存在論について、それが観念論から実在論への道筋を辿ったとする伝統的解釈を退け、問題は物体（外的世界）の存在の有無ではなく、物体の物質としての「延長」を認めるか否かに関わり、『感覚論』精神と物体の本質から延長を排除し、延長は現象であるという存在論的立場にたって、人間精神の起源と生成の記述を試みたものであり、しかもそれは著者の神学に対する配慮と無関係ではないという見通しを打ち出す。

本論文は、テクストの綿密で執拗な読解に加えて、その哲学的背景を、ロックを始めする近世の哲学的伝統のうちに探索し、前期コンディヤック哲学の理解に役立つ多くの知見を提出している。テクストに密着するあまり、論者の立場がくっきりと浮かび上がらない悔やみはあるが、本論文が、コンディヤック研究にとどまらずフランス近世の哲学・思想の研究に新鮮な寄与をなしたことは確かである。以上から審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。